



# 同窓会だより

## 同窓会新執行部の挨拶

同窓会会長 神田 正一



今年4月の総会において、新しい執行部が承認され、今年度の同窓会も滑り出しました。私は会長として3期目となりますが、各事業を理事の皆さんのご協力の元、遂行して行きたい

と思っています。来年の事となりますが、全歯懇及び国歯協の主催が予定されており、この夏より準備委員会を立ち上げ、動き始めました。その事もあり、三役にも新しく宮野副会長、鈴木副会長に加わってもらい、又、各担当理事にも若手の同窓生に参加していただきました。

この7月、同窓会各県支部の支部長に集まっていたき、東京において2回目の支部長会議を開催致しました。3年前に第1回を新潟で開き、今回は東京でということ、我々本部からも6名出席しました。大学側から、山田教授に「歯学部の方」という演題で講演していただいた後、各支部の実情を聞いたり、本部に対する意見等を聞き、有意義な会となりました。

さて、毎年刊行している同窓会誌も、段々と充

実してきて、全国各地で活躍されている同窓の方々の様子が同え、又、各同級会の開催の写真等、懐かしく楽しみに読んでいます。広報理事の努力によるところ大であり、これからも会員の皆様の益々の投稿を期待致します。こうした同窓会誌、名簿発行等、形として見えるものや、学生への援助、学術セミナーの開催、全歯懇等他大学との連携等、同窓会の活動は多岐に渡っております。これらの活動は同窓会費によって支えられているのは申すまでもありません。この会費納入率が年々低下しており、我々執行部は頭を痛めている所です。勿論、我が校ばかりではなく、国立私立を問わず他同窓会もこの問題を抱えており、度々協議会の議題となっています。同窓会あるいは母校に対する思い、そして会費納入に見合うメリット、この二つが大きな柱という事でしようが、各会員の皆様にはご理解とご協力をお願いするところで

す。大学内の状況も目覚しく変化しており、若い教授、他大学からの教授の就任と、動きが活発になってきております。大学も病診連携等を通じて、地域や同窓会との関わりも重視して来ています。情報の交換を密にして活動して行きたいと思えます。

この2年間の任期を、非力ではありますが、精一杯努力してやって行きたいと思えます。皆様方のご協力を宜しくお願い申し上げます。



## ごあいさつ

同窓会副会長 宮野正美



このたび、神田正一同窓会会長の三期目の執行にあたり、副会長の大役を仰せつかりました11期生の宮野正美と申します。これまで、同窓会事業には学術理事として3期6年、総務理事として1期2年携わって参りました。これらの経験をもとに、同窓会事業の一層の発展のために少しでもお役に立てれば思っております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

新潟大学歯学部同窓会は、平成14年3月に32期生が卒業し、1,700余名の同窓生を抱える組織となりました。同窓生が増えるというのはうれしい一方、1期生から32期生まで30歳以上の年齢差が生じ、当然のことながらこの差は今後ますます開いて行きます。数の増加と相俟って、少しずつ、文字どおり「顔」の見えにくい組織となってきました。また、どんな組織においても言えることなのでしょうが、世代間によつての「思い入れ」の差も生じて来ているようです。このことは会費納入率に現れ始めているようで、残念ながら、卒業期により差が出始めてきています。もちろん単に帰属意識に頼って、会費を納めて頂けるなどとは思っておりません。「同窓会って何やってくれるの？」という声に少しでもお答えできるよう、理事会では事業内容を吟味検討いたしております。

会則に謳われているように、同窓会の目的は、会員相互の親睦を図り、もつて会員の使命達成に資することにあり、会員名簿及び同窓会誌の発行、学術講演会・各種セミナーの開催、緊急時代診医相談窓口の開設、慶弔関係業務の充実等、各種事業を行っております。また、全国には16支部ありますが、会員の先生が新潟県外に出られても支部組織のなかにスムーズに入会いただけるよう、連

携を密に取る必要もあります。また、時間と距離をつめ、会員と執行部、会員相互の意思の疎通を図るため、HPの充実も有効な手段となり得るものと思います。

私たちの生みの親とも言える「新潟大学歯学部」も、花田学部長、河野病院長をはじめとする諸先生の多大なご努力より新潟大学大学院医歯学総合研究科としてスタートしています。重要性が増している病診連携、平成18年度から始まる研修医制度の従たる施設等会員と学部との関係も一層大切になるものと思われます。同窓会としても正確且つ迅速な情報提供を行う必要があるでしょう。

会員の皆様の同窓会事業に対してのご理解、ご協力ならびに積極的なご参加をお願い申し上げます。

## 同窓会副会長 就任にあたって

組織再建口腔外科・医療情報部室 鈴木一郎 (11期)



神田会長のご指名により、このたび副会長の役に就くこととなりました。同窓会とは率直後より名簿編集や渉外担当理事としてかわりを持ち、同窓会と大学との橋渡しのような役割を担当してきましたが、今回は執行部の一員として会の運営を直接担う立場となり、その重責を感じるとともに今後の会のあり方について私なりに考えてみました。

私が卒業した頃の同窓会は会員も500名に満たないとてもごぢんまりとした会でした。当時は事務員もおらず、同窓会役員の実態は肉体労働のボランティアで会員管理や発送業務まですべて役員の仕事という時代でした。当時、今では信じられないような高い会費納入率を保つことができた一因は、小さい同世代コミュニティ故の仲間意識が会員に行き渡っていたからでしょう。以来20年の



間、私自身は相も変わらず理事として与えられた役割分担のみを肉体労働的にこなしてきましたが、考えてみるとその間に会員は4倍に増え、その年齢構成は世代を超え、また歯科医療や歯学部をとりまく社会環境も大きく変わりました。大所帯になったことは何よりスケールメリットという大きな利点がある一方で、規模や構成に応じた最適な運営方法をとらないと組織は動きません。会員の同窓会に対する思い入れの低下やサービスに対する不満が会費納入率を低下させ、財政難が更なるサービス低下を招くという悪循環はこの組織が一種のデッドロックに陥っている現状を表しているのかもしれない。

社会全体の余力がなくなっている今、同窓会もかつてのように余剰資源で成り立つような時代ではありませんから、自らをスリムアップする必要がありますし、一方では多様な会員の要求に応ずるサービスを提供してゆかねばなりません。新潟大学の同窓会である以上新潟中心という事業の偏在は止むを得ませんが、日本全国に分散する会員へのサービス格差をなくす努力は必要でしょう。

早くて安い情報インフラが得られる今、この手段を用いない手はありません。以前より同窓会ホームページの構築やインターネット上のメールングリストを利用した情報交換などを行ってききましたが、いずれもマンパワー不足と私の怠慢とで中途半端なものとなっていました。今回、同窓会ホームページは広報理事に管理していただくこととし、迅速な情報更新を目指します。また電子メールを利用した情報交換や学術講演会のアーカイブ化なども積極的に行ってゆきたいと考えています。私事ですが、私は附属病院の医療情報部室という部署を担当していますので、歯学部や附属病院と同窓会との情報交換も強力に推進したいと思います。

新大歯学部同窓会は同窓生の気軽な親睦団体であるとともに、歯科医療や歯学にかかわりをもつさまざまなプロフェッショナルが揃うコミュニティとして機能することを目指したいものです。

## 平成14年度 同窓会総会を終えて

同窓会副会長 赤坂長右

日 時：平成14年4月20日(土)

午後12時30分～

場 所：歯学部第1講義室

会費納入率の低下や各種同窓会事業への参加者数の低迷など、いくつかの課題を抱えながら、本年度も総会の開催で同窓会事業がスタートしました。

14年度からは任期が代わりましたが、3期目を迎えた神田会長のもと、新しく若い理事が加わったり副会長が増員されるなど、組織的に変化が見られ、さらに同窓会事業が活性化していくと感じています。

議長に2回生の長谷川総務理事を選出した後、議長の計らいで昨年度逝去された3名の会員に黙禱を捧げました。総会で黙禱をしない年がないくらいに会員の訃報が届いているわけですが、会員の皆様のつつがないことを願わずにはいられません。

さて今回の総会では、協議に時間を当てるべく、各担当理事がそれぞれ行なっていた事業報告や事業計画を、すべて一括して深町専務理事が担当し、かなりの時間短縮がなされました。

ご案内のように、同窓会総会と新潟歯学会は同日に開催されていますが、主催者にとって以前から時間的に厳しい運営を強いられていました。今回のこの時間短縮により、スケジュールの面での問題が解決できたと自負しております。

議案事項の中で特筆すべきことは、会費未納者対策、支部長会議の開催、慶弔内規の見直し、全歯懇主管が協議された点であります。

まず会費未納者対策です。かつて80%台を誇っていた会費納入率は年々減少し、現在では60%台で推移しております。同窓会員としての自覚を持っていただくために卒業式に併せて同窓会入会式





を開催したり、会費の自動口座振替システムを導入したり、様々の対策を講じてきている訳ですが、今回、次のような提案がなされました。①会の福利厚生事業を会員に広報する。②新入同窓生にアンケートをして会への帰属意識を探る。③会費未納者に対して何らかの方法で督促をする。貴重なご意見を会務に活かしてまいろうと思います。

次に支部長会議の開催です。会員、特に遠方の会員に、会員としてのメリットを感じていただくことはなかなか難しいことです。現況では支部が会員と本会とをつなぐ大切な役を担っている訳ですが、遠方の会員の意識を把握し、支部の活性化を図るために、3年ぶりの第2回支部長会議が提案されました。総務担当で7月東京開催ということでご承認をいただきました。

三つめが慶弔内規の見直しです。以前から、同窓会への所属を顕彰しつつ弔意を表わすことが提案されていましたが、今回、「香典に代えて供花をもって弔意を表わす」ことに改正されました。最後に全歯懇主管の件です。順番どおりに開催されると、平成15年秋の全歯懇は本同窓会が当番校になっており、5月の理事会の議を経て全歯懇準備委員会が発足することになりました。

以上の様な審議を経て、13年度決算、14年度事業案・予算案が満場一致で承認されました。

組織が大きくなっても会員との間に隙間を生じることのないように、会を運営する側が魅力ある同窓会を目指すことは当然ですが、会員の皆様も、ご意見を直接言える総会の場をもっと活用していただきたいものです。来年度の総会に期待をしています。

## 平成14年度同窓会総会講演 「現代の歯内療法の流れ」 総合診療部教授 興地 隆史先生 の講演を拝聴して

橋本和彦(31期)

平成14年4月20日、歯学部大講堂において歯学

部総合診療部教授興地隆史先生より、「現代の歯内療法の流れ」と題した講演をして頂きました。歯内療法は歯科治療を行なっていく上で必要な基本的技術ではありますが、成功するか否かが歯の予後を大きく変えてしまう重要な処置の1つであり、近年様々な新しい技術の開発が進んで大変興味深い分野となっております。そのような今日を反映して、今回の講演においても午後3時近くの開演だったにも関わらず、多数の先生方が出席されており、関心の高さを物語っていました。

お話は根尖病巣における免疫反応についてから始まり、根管形成法(ステップバック法、Ni-Ti ファイルによる根管形成法)、根管洗浄(NaClOを中心として)、根管貼薬(水酸化カルシウム)、根管充填(垂直加圧法)、最近のトピックス(歯内療法におけるマイクロスコープの使用等)と臨床の肝となる部分を中心に、豊富な症例の写真に加え、最新の情報・ユーマアを交えながらのわかりやすい講演でした。質疑応答でも、移植歯後の貼薬についてやQuestionableな根尖病巣のフォロ一期間についてなど設けられた時間では足りないほど多数の質問が寄せられました。

今回の講演では目から鱗が落ちることばかりでしたが、その中でも、根管治療において大切なのは機械的根管拡大とNaClOによる洗浄で、根管貼薬した薬品の殺菌力で無菌化をはかるのではないというのが印象的でした。自分の臨床では貼薬薬剤の殺菌力を重視し、根管洗浄を軽視していた傾向があったため、改めて己の無知さ加減を思いしらされました。

最後に、ご多忙中にも関わらず御講演下さった興地隆史教授に深く御礼申し上げます。

## 3年ぶりの 支部長会議開催される

副会長 赤坂長右

平成11年に初めて開催されて以来、久しぶりの支部長会議が、去る7月6日午後3時から、東京





八重洲富士屋ホテルにて開催されました。新潟での第1回目とは場所を変えて、東京での開催となった今回の会議には、関東を中心に9支部の支部長が顔をそろえ、本部からは会長以下6名が出席しました。

3時間という限られた時間の中で、最初に、顎顔面機能学分野の山田好秋教授から「歯学部の方」と題して講演をしていただいた後、各支部の抱える問題、本部提示の同窓会費納入率低下対策などを主題に据えて、中身の濃い意見交換を行いました。

会議終了後、会場を変えて、引き続き懇親会に移りました。立食型に準備されていた会場を、すぐさま着席型に模様替えし、会議で話し足りなかった事やご当地の歯科医師会事情など、話は尽きることがなく、時間を延長してのお開きとなりました。

詳細は、来春発行の同窓会誌に掲載予定ですので、ご覧ください。

## 第47回全国歯科大学同窓・ 校友会懇話会報告

同窓会会長 神 田 正 一

日 時：平成14年6月15日(土) 午後2時～

場 所：日大会館

当番校：日本大学松戸歯学部

第47回全国歯科大学同窓・校友会懇話会が、日本大学松戸歯学部同窓会の主催により、東京市ヶ谷の日大会館にて開催された。当番校同窓会長の挨拶で始まり、日本歯科医師会白田貞夫会長ら来賓の挨拶の後、早速会議に移った。

まず、特別講演「今、我々が生きている時代の意味」が行われた。講師、寺島実郎氏は三井物産戦略研究所所長であり、経済学、社会学的見地から、これからの日本について述べられた。日本の急激な人口増加は4年後にピークを迎え、後は年60万人ずつの減少が見込まれ、100年後には5000万人

と、今の半分となる事が統計学上推定されている。この事が日本の国力には一番重要で、考えておかなければならない事である。そして、人口構造も2050年には36%が65歳以上の超高齢化社会となり、教育制度や産業構造の見直しが当然必要となる。国際的には、中国の存在が大きくなり、人口的に見ても現在の日本1：中国10から1：20となって行かだろう。又、現在のいわゆるIT革命とグローバル化という事についても、ただ表面的な事象に躍らされており、情報化による過敏性を指摘された。又、国家情報のセキュリティを十分考えておかなければならないとの警鐘をならされて、key-wordとして、これからは“セキュリティ”と“ヒューマニティー”であると述べられた。最後に五木寛之氏の言葉を紹介され、和魂洋才から無魂洋才へ、そして洋魂洋才へと迫られているが、これからどうなるか…。以上、日本の将来への見通しについて語られた。

歯学とは離れた講演であったが、その内容は大変示唆に富むものであった。

続いて、協議に移り、この全歯懇を年1回にしたらどうかという提案がなされ、全会一致で承認された。尚、これは再来年度よりということで、来年秋の第49回全歯懇の当番校は新潟大学という事が承認された。又、本会議ももう少し各大学の発言の場にし、テーマを選んで協議をやったらという意見が出され、今後の会の進め方について意見が出た。その他、北大より、札幌医大研修医のいわゆる「松原裁判」についての支援要請が出された。

最後に、次期当番校の松本歯科大より挨拶があり、11月16日(土)に開催される事が決まった。

以上のように、全歯懇は来年秋に我々同窓会が主催する事に決まり、これから準備を進めて行かなければならない。各会員の皆様のご協力をお願い致します。



\*\*\*\*\*

## 平成14年度春の新設国立大学 歯学部同窓会連絡協議会に 出席して

同窓会副会長 多和田 孝 雄

日 時：平成14年6月16日（日）午前9時～12時  
場 所：オリンピック・イン・神田  
当番校：徳島大歯学部同窓会

第47回全歯懇の翌日に徳島大学歯学部同窓会の主催により国歯協が例年通り開催されました。昨日とは違って、非常に蒸し暑い日でしたが、「国歯協のありがた」や各同窓会の抱える悩み等について熱心に討議がなされました。全国の10大学から25名の参加があり、本校からは神田会長と私が出席しました。

当番校の笠原信治会長の挨拶の後、出席者の自己紹介に続き、早速協議に移りましたが、今回は協議事項が多く、恒例となっていた講演会はありませんでした。協議の進行の順番に多少の変更がありました。実際に行われた順に報告いたします。

### 1. 市立札幌病院の研修医問題について

この問題については北海道大学歯学部同窓会の村井清彦会長より詳細な報告がありました。上記病院において、松原医師の指導のもと3名の歯科研修医が行った気管挿管が歯科医師の業務範囲を逸脱しているのではないかという他の医師の指摘により、現在大きな問題になっています。この事実を厚生労働省が重視し、本年2月12日に松原医師が起訴されるという結果になりました。また、4月1日には村井会長が「支援する会」の代表に就任したとのことです。この件は歯科医師の業務範囲に関わることであり、歯科界の各方面からも多くの支援が寄せられてはいるが、裁判には多額の費用が必要であり、各同窓会にも寄付金等のお願いをしたいということでした。

### 2. 今後の歯学部同窓会のあり方について

各同窓会から返送された事前調査の結果がまと

められており、それぞれが説明や追加を加える形で会議が進行しました。多くの同窓会が重点的に取り組んでいることは、インターネット上のホームページの充実と同窓会会費の効率的納入手段としての金融機関での会費引き落としでした。我々の同窓会に関しては、神田会長が緊急時代診医相談窓口について説明いたしました。

### 3. 東京医科歯科大学の入会希望について

### 4. 国歯協のあり方について

3及び4の協議題については、同時に且つ関連して議論せざるを得ないことから、一括審議となりました。本協議会を各同窓会の意見交換及び情報交換の場であるとの認識は全ての同窓会に共通しています。しかし、今後、医政の部分に踏み込んでいくか否かについては、まだ全体の合意があるわけではなく、東京医科歯科大学同窓会のように必然的に医政にも大きく関わっている同窓会の本会への参加は当面見送るべきだということで、最終の結論となりました。

### 5. 臨床研修について（東北大学歯学部同窓会提出議題）

平成12年11月の第150回臨時国会で「医療法の一部を改正する法律」が成立し、医師及び歯科医師の臨床研修が必修化されたが、研修期間として医師2年以上に対して歯科医師1年以上とするのは問題ではないかということで、議題が提出されました。この点に関して、大阪大学歯学部同窓会の玉利会長より法案成立の経過に対する説明があり、各大学及び地域における研修医受け入れ態勢の不備が主因とのことでした。

### 6. 次々回の当番校について

次回は大阪大学、次々回は長崎大学に決定しました。

\*\*\*\*\*

## 「平成14年度第一回歯学部 教授会・同窓会定期協議会」報告

渉外担当理事 峯尾 総一 (16期)

日 時：平成14年7月24日(水)午後7時より

場 所：割烹「しまや」

出席者：

教授会 花田歯学部長、河野病院長、野村教授、  
山田教授

同窓会 神田会長、赤坂副会長、多和田副会長、  
鈴木副会長、宮野副会長、峯尾渉外理事

本年度も上記協議会が「しまや」にて行われました。

宮野総務理事の司会のもと、まず同窓会を代表して神田会長より挨拶がありました。同窓会支部長会議が東京にて開催された件、6年生への進路相談会が近日中に開催される件、来年11月の、「全国歯科大学同窓・校友会懇話会」が新潟において開催予定で、新潟大学歯学部が当番校である件等が報告され、理解と協力がお願いされました。

その後、花田歯学部長・河野病院長より挨拶がありました。内容は多岐にわたり、また、途中、各教授より、いろいろな問題提起があり、その都度、意見交換がなされましたのでその要点(題名程度ですが)を記します。

- ・口腔生命保健学科の新設に関して
- ・歯科大学・歯学部の定員削減と、歯科医師会との関連
- ・新潟大学歯学部・病院の統合問題について
- ・6年生の進路に関して
- ・病診連携について(開業医からの報告例が期待されている)
- ・オープンホスピタルを推進

大学と同窓会との協力がとくに期待される内容としては次のようなものがありました。

- ・患者紹介の件

患者紹介は、もちろん、患者の利益のために行われるものではありませんが、紹介元の先生にはで

きるだけの便宜を図り、さまざまな要望に答えるようにしています。同窓の先生には、母校でもあるのですから、個々の紹介患者について紹介ごとにどんどん要望をつけて欲しいとのことでした。

たとえば、大学でどの範囲まで治療を希望するのかとか、なにをどう加療したら紹介元に患者を戻して欲しいとか、それぞれ検査のみの希望でも、まったく構わないとのことでした。トラブルに関する件は病院長が引き受けるとのことです。

医師である以上、患者の利益を第一に考えることはいうまでもありません。ただ、医療(とくに歯科)を取り巻く環境は年々悪化する一方で、しかも患者側の要望もますます高くなっています。こういう時代であるからこそ、大学と同窓会、ひいては附属病院と開業医が連携していくことにより、いままでなかった新しいなにか(それは、大学にとっても開業医にとっても利益になり得るなにか)が生まれそうな予感がいたしました。

また、そのようなことを強く感じさせるということが、本協議会の誠に建設的・友好的である証左でもあるように思えました。

## 同窓会主催「歯学部6年生の進路 をアドバイスする会」開催される

渉外担当理事 飯田 明彦

恒例の同窓会主催「6年生の進路をアドバイスする会」が、2002年7月26日(金)に、歯学部大会議室で行われた。今年は、昨年までと趣向を変え、事前に学生に対しアンケートを行って、学生の望む講師像、現段階での進路や知っておきたい情報を調査し、それらに対する回答を示すという方法をとった。このような準備で学生のモチベーションが上がったのか、冷たいビールに誘われたのかは不明だが、学生は6年生のほぼ全員である約60名が集まった。

会は鈴木副会長の司会で始まり、まず、深町専務理事から同窓会のあらましについてお話があつ



た。特に、全国に16ある同窓会の各支部との連絡を緊密に行うこと、また、就職の斡旋などをしてもらったときには結果の報告やあいさつ等を忘れないことなど、同窓会とのつきあい方について説明された。

次に、新潟市歯科医師会専務理事の登坂邦彦先生により「卒業後の進路（開業の手引き）—歯科医師会からの情報提供」と題する講演が行われた。歯科医師として、大学人・研究者、行政関係、勤務医、開業医などの中から何になるかを決め、何をしていくのが目標を定めることが重要である。その中で、開業を選んだ場合、人生設計、医療スタイル、収支見積もりなどから開業地を選定していくのが妥当な方法であるとの説明があった。また、新潟県・新潟市における人口10万人対医療施設従事者数の年次推移や会員収入の現状などの説明があり、さらに歯科医院の倒産の原因が以前の原因不明から、患者数の減少など理由のはっきりしたものに変化してきているというような話が行われた。思った以上に厳しい現状を目の当たりにした学生の表情は、梅雨明けした夏空とは裏腹にどんよりと曇っていた。

続いて、事前アンケートの結果報告が司会の鈴木先生から行われた。いつ頃進路を決めたか、勤

務先の探し方、卒後すぐに勤務医になるメリット・デメリットなど、参加者のほぼ全員が共感できるようなものから、出会いは極端に減ってしまうのか(いったいどんな出会いなのでしょう?)などユニークなものまで多くの疑問、質問があることが明らかとなった。

ビールの準備ができるまでの間、神田会長、赤坂副会長、多和田副会長、長谷川理事、佐藤理事、田口理事などから、今まで歩んできた経歴の説明と後輩たちへのアドバイスが行われた。その後、神田会長の乾杯の音頭でビールパーティが始まった。学外の同窓会役員が学生7、8名のテーブルに、それぞれ1名ずつ配置され、学生との意見交換を行った。緊張からか、それともそれまでの暗い内容の話からか、はじめは固かった学生の表情も、少しずつ和らぎ活発な意見交換が行われた。事前のアンケート調査は、同窓会役員にとっては学生がどのようなことを疑問に思っているのかを知る上で、また、学生にとっても、それを同窓会役員や同級生に知らしめる上で非常に有用であると思われた。この企画が、学生の皆さんの進路決定に対し有意義なものになって欲しいと切に願っている。

